



山梨県みんなで楽しむバリアフリー演劇祭

星の王子さま よっぱらい場面より

Line Up

- P2・3……みんなで楽しむバリアフリー演劇祭報告
- P4……事業所日常の1コマ



# 山梨県みんなで楽しむ バリアフリー演劇祭レポート

八ヶ岳名水会常務理事 仁田坂 洋子



令和4年9月に日野春学舎にて、「山梨県みんなで楽しむバリアフリー演劇祭」が開催されました。体育館では、17日にヘレンケラー、18日にTouchと劇団夢屋の妖怪バリアーをやっつけろ！19日に星の王子さまの舞台と、その合間に表現活動のシンポジウムが行われ、盛りだくさんの、濃く、充実した3日間を振り返ります。

日野春学舎の2階では、16人の肖像展が開催され、そこには、星の里創設当時から地域生活への移行ができていない方の大きな写真が、展示されていました。移行ができていないと聞くと、彼らの生活は30年間、入所施設の中ですが、表情には暮らしの積み重ねがあふれ、写真家の大西さんが引き出して下さった屈託なく笑う笑顔と、堂々とした姿に、彼らの強さを感じられました。坂本会長の「私は、まだ皆さんとの約束を果たしていません。全員を地域へ移行させることができず、申し訳ない」という声に心が響き、その言葉に涙を流す職員がいました。大西さんと坂本会長のやりとりが会場にふわりと広がります。この思いをつなげることを忘れてはいけないと感じた瞬間でした。

隣の教室では、八ヶ岳名水会のご本人さんたちの陶芸の作品が時計や、タイル、小皿となり、展示と即売がされています。小学校の教室の黒い



価値のあるものだということの裏付けですよね。・・・彼らの作品が評価されたことは、職員も一緒に制作を担っていると、誇りに感じられた場面でした。

この演劇祭の目的の一つに、職員が合理的配慮を学ぶこともありました。実行委員会では事前に palabra (株) の山上さんを講師にお招きして、合理的配慮の研修を行うことで、理解を深めることとなりました。当日は演劇



板の上に無造作にセンス良く並べられた作品たちは、とてもアーティスティックで、いつも以上に素敵な作品のように感じられました。それが本当に飛ぶように売れていくのですから、

集団風のバリアフリーの舞台で、手話通訳、字幕、音声ガイドなどの研修で学んだことの配慮と、サブライズのようなものだったのですが、舞台へ上がってしまいうご本人さんたちと一緒に巻き込み、一緒に演じてしまおうというスペシヤルな配慮を見ることができました。この経験により、合理的配慮とはお互いの思いが通い合い、そこに影響しあえる関係を感じ取ることができたのではないかと思います。

星の王子さまの舞台では、キッズクラブひまわりのご本人さんが、ワクワクしながら「舞台へ登っていい？」と聞き、嬉々として上がっていったと話を聞きます。見ていた観客は、実はそれは仕込みだったのでは！？

と思うほど、白根さんの王子様と彼が演じたプチ王子の呼吸はぴったりで、違和感のない感動的な舞台になったその感想を聞いておられます。また、星の王子さまの舞台の後半



に、みんなで壇上上がり、挿入歌を歌った時には、普段から見ている以上の彼らの笑顔がかがやき、大勢の人の中で過ごすことができたことに、再び感動をすることになりました。星の里のご本人さんたち二人のピアノ演奏も劇の中に取り込まれて、何度も何度も感動の波が押し寄せてくるような、そんな舞台でした。

ここでもう一つ、演劇祭で得た経験です。今回、3つの演目を連続で行うことで、毎日裏では演目の後に舞台の入れ替えが行われておりました。そのお手伝いに、私も含めて、現場職員を参加させていただきました。参加した職員の感想では「皆さんの舞台を成功させる裏方の力と、

それをみんなで支えているという、チーム力を見せていただきました。」という言葉を聞き、学ぶことが多くいい機会だったと改めて感じました。

### エピソードとして・・・

演劇祭の後に、風の皆さんと話をする機会がありました。その中で、「福祉って、もっとお堅い世界で、自分とは縁のないものだと思っていました。けど今は皆さんから元氣と感動をもらっています。」という嬉しい感想をいただきました。また一人、理解者が増えました。それ以上の発見なのですが、ご本人である彼らが笑顔で、全身で楽しんでいる姿から、劇団風の皆さんが、それぞれ自分の可能性を見出しているように思えました。改めて、彼らの引き出す力の凄さと、それを見出すことができる、風の皆さんたちに拍手を送らせていただきます。

そんな時間と感動をいただけたこと、これからの、お互いがお互いのことを考えることで影響しあえることが良いと、普通に理解されるような時代が来る期待が詰まった演劇祭でした。たくさんの皆さんのご協力があつて、実現できたことを感謝いたします、本当にありがとうございます。

# 星の里

魚多 和輝

星の里の生活介護事業ではアート活動を中心に行っています。粘土細工や陶芸、習字や絵画など利用者様が自由に選択して取り組んでいます。2022年秋に行われた第37回障害者による書道・写真全国コンテストへ星の里からも応募しました。その中で有賀英樹さんの作品が書道部門で銅賞に選ばれました。また同年12月に行われた第33回山梨県障害者の主張大会では吉田沙緒里さんが参



加し最優秀賞に選ばれました。

日常の創作活動や表現活動を

通し目標ができて動作や知識の習得などに取り組んでいます。そこには職員が日々活動の内容を考慮え工夫し、利用者様一人ひとりにあった活動を提供していったことで成しえた結果だと思えます。コロナ禍で行動制限のある中でも利用者様が楽しくやりがいのある活動を提供していけるよう力を入れていきたいと思えます。

# はるのひ・なのはな

坂本 修・蔡花

New story『染色』という名のマジック

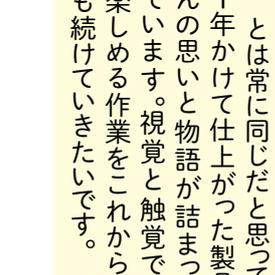
春の陽で行っていた、藍染めとマリゴールド染めを去年から、はるのひ・なのはな共働作業の二環として、今では準備から完成まで一緒に取り組んでいます。はじめた目的としては、コロナ禍でイベントや販売が少なくなり、当事者の方々の可能性や名水会の活動を地域の皆様



えます。日を浴びて満開になったマリゴールドの花と、藍の葉を夏から秋にかけて収穫し、天日干しして、冬の『染め作業』に備えて準備を行っています。

『染めの作業』では、事前に煮込んだ花の液と染め液を使い、魔法をかけて変色させます。色が変わっていくこの瞬間、静かに変色を感じている利用者さんと、ほら！魔法だよ！と興奮している利用者さんと二つに分かれています。それぞれ発信する方法は異なりますが、考えていること感じていることは常と同じだと思っています。

1年かけて仕上がった製品には、たくさん思いと物語が詰まっています。視覚と触覚で楽しめる作業をこれからも続けていきたいです。



# のはら楽団

樋口 和穂

2月3日は、節分豆まきを行いました。鬼に豆をぶつけるのは、邪気を追い払い無病息災を願う意味合いもこめられているとか…。豆まきで使う大豆は、農場の畑で収穫した大豆を使わせて頂きました。丹精こめて作った大豆は、就労メンバーが、ひとつぶひとつぶ、選別をしています。気の遠くなるような細かい作業ですが、皆さん一生懸命頑張っています。その中でキズ・割れがある大豆を分けて頂き、生活介護のメンバーが、尊い大豆を、こぼさない様に丁寧に袋詰め作業をしました。



節分当日は、体育館の広いスペースを存分に使い、のはら楽団のメンバーが、尊い大豆を、こぼさない様に丁寧に袋詰め作業をしました。



節分当日は、体育館の広いスペースを存分に使い、のはら楽団のメンバーが、尊い大豆を、こぼさない様に丁寧に袋詰め作業をしました。

# キッズクラブひまわり

山坂 奈津美

毎年実施していた「友だちの輪コンサート」が、コロナウイルス感染症の影響により、三年連続で中止となり、キッズクラブひまわりでは今年「新年会」と題して習字の書き初め大会を行いました。今年の目標は、と尋ねるスタッフに、「漢字を頑張りたい」「足算を頑張りたい」と勉強熱心な答えから、「背が高くなる運動を頑張りたい」「絵をたくさん描きたい」とそ



の子らしい答えが出てきて、感心するばかりでした。冬休み中ということもあって、こま作りも実施し、こまへの色付けから始まり、回して、その様子を眺めて、を楽しみました。中には別の回し方に挑戦する子もいて、元氣いっぱいの子どもの様子を見て、たくさん見ることができました。四月にまたひと学年上がる子ども達、今年度も残りわずかとなりませんが、その中の成長が今後楽しみます。